

〔論 説〕

「西洋の救済」(1)

——キリスト教民主主義・保守主義勢力と  
ヨーロッパ統合、1925-1965年——

板 橋 拓 己

〈目次〉

はじめに

第一章 キリスト教民主主義の国際ネットワークとヨーロッパ統合

第一節 戦間期の国際協調の模索

——キリスト教民主主義政党国際事務局 (SIPDIC)

第二節 亡命者のネットワーク

第三節 NEI (1947-1965年)

第四節 ジュネーブ・サークル (1947-1955年)

第五節 ジュネーブ・サークルとアデナウアー外交

——「西側結合」の貫徹

第六節 キリスト教民主主義の「ヨーロッパ」

——「西洋」へのドイツの再統合

(以上、本号)

第二章 キリスト教保守派の「西洋」主義

はじめに

…もし私たちが西洋の文化とキリスト教的ヨーロッパを救おうとするならば、ヨーロッパを統合せねばなりません。ヨーロッパ統合は、キリスト教的西洋を救済することができる唯一の策なのです。

——1951年9月14日、NEIの大会におけるアデナウアーの演説<sup>1</sup>

## ヨーロッパ統合と近代

ヨーロッパ統合と「近代」はいかなる関係にあるのか。この問いは、ヨーロッパ統合というプロジェクトの世界史的意味をどう考えるか、あるいはヨーロッパ統合の歴史をいかに叙述するかに深く関わっている。

これまでヨーロッパ統合の歴史は、単線的な近代主義史観の延長線上で把握されがちであったように思える。たとえば、しばしばヨーロッパ統合は「ポスト・ナショナル」あるいは「ポスト国民国家」の試みと呼ばれるが、「ネイション＝国民」や「国民国家」が近代の産物であることに鑑みるなら、この場合さしずめヨーロッパ統合は、ポスト近代のプロジェクトと位置づけられるだろう。あるいはハーバーマスに倣って、ヨーロッパ統合を近代の「未完のプロジェクト」の一つと位置づけることも可能だろう。現在までのヨーロッパ統合の成果を考えると、こうした近代主義的な語りは至極妥当なものにも思える。とはいえ、ヨーロッパ統合の歴史は、単線的な進歩主義史観のみでは捉えきれない。「正史」のみに寄りかかっていたのでは、いかなる政治力学、あるいは政治理念から、ヨーロッパ統合というプロジェクトが歴史的に支えられてきたのかを説明することはできないのである。

些か抽象的な表現だが、ヨーロッパ統合は、反近代と近代とポスト近代、これら近代をめぐるそれぞれのベクトルがせめぎ合うなかで進められてきたと筆者は考えている。そこで本稿では、かかるヨーロッパ統合の複合的性格の一端を明らかにするために、キリスト教政治勢力とヨーロッパ統合の関係に着目する。世俗化をはじめ近代が齎す政治的・社会的諸帰結に対し、ヨーロッパにおいて最も正面から格闘したのが、所謂「政治的カトリシズム」や「キリスト教民主主義」をはじめとするキリスト教系の政治諸勢力だったからである。そして同時に彼らは、ヨーロッパ統合の歴史において独特の存在感を有し続けてきた。

## キリスト教民主主義・保守主義勢力とヨーロッパ統合

1951年の欧州石炭鉄鋼共同体 (ECSC) 条約に調印した6カ国の外相全

---

1 Konrad Adenauer, "Deutschland und der Friede in Europa," Ansprache vor den Nouvelles Equipes Internationales in Bad Ems, 14. September 1951, in: ders., *Reden 1917-1967. Eine Auswahl*, hg. von Hans-Peter Schwarz, Stuttgart: Deutsche Verlags-Anstalt, 1975, S. 224-232, hier S. 230.

員が其々のキリスト教民主主義政党に所属していたこと、また、ECSCを主導したロベール・シューマン (Robert Schuman, 1886-1963)、コンラート・アデナウアー (Konrad Adenauer, 1876-1967)、アルチーデ・デ・ガスペリ (Aldice De Gasperi, 1881-1954) の三人がともに確信的なキリスト教民主主義者であったことに象徴されるように、キリスト教民主主義が第二次世界大戦後のヨーロッパ統合の一大推進勢力であったことは夙に指摘されてきた<sup>2</sup>。そして近年、ヴォルフラム・カイザー (Wolfram Kaiser) らによって、キリスト教民主主義のトランスナショナルなネットワークがヨーロッパ統合の成立や深化に果たした役割が、実証的にも跡付けられつつある<sup>3</sup>。

本稿は、かかるキリスト教民主主義の国際ネットワークに関する研究の到達点を確認するとともに、さらに「アーベントラント運動」という保守派のネットワークにも着目する。アーベントラント運動とは、「アーベントラント (Abendland: 西洋)」というスローガンを掲げて、やはりある種のヨーロッパ統合を唱道し、1950年代のドイツ連邦共和国で隆盛を極めたキリスト教保守派の運動である。加えてアーベントラント運動は、「ヨーロッパ文書・情報センター (Centre Européen de Documentation et Information / Das Europäische Dokumentations- und Informationszentrum: CEDI)」という、52年にスペインを拠点として組織された国際ネットワークと結び付いていた。このアーベントラント運動は、カイザーらが

---

2 水島治郎「ヨーロッパ政治の基層——「二つの民主主義」の視点から」榊山 紘一・長尾龍一 (編)『ヨーロッパのアイデンティティ』(ライブラリ相関社会科学1) 新世社、1993年、77-94頁、とくに86-87頁；同「キリスト教民主主義とは何か——西欧キリスト教民主主義概論」田口晃・土倉莞爾 (編)『キリスト教民主主義と西ヨーロッパ政治』木鐸社、2008年、19-44頁、とくに31-32頁を参照。

3 当該テーマについてカイザーは実に多くの単著・共著論文を公刊しているが、さしあたり集大成にあたる次の書を挙げておく。Wolfram Kaiser, *Christian Democracy and the Origins of European Union*, Cambridge: Cambridge University Press, 2007. キリスト教民主主義研究におけるカイザーの位置については、土倉莞爾「キリスト教民主主義の全盛と衰退——第2次大戦以降の比較政治史的考察」『関西大学法学論集』第61巻4号、2011年、875-909頁、とくに875-883頁を参照。ヨーロッパ統合史研究におけるカイザーの方法論の意義については、後掲の注35を参照。

対象としたようなキリスト教民主主義のネットワークと人的・思想的に重なり合って展開されたにも係わらず、従来のキリスト教民主主義研究やヨーロッパ統合史研究では等閑視されてきた<sup>4</sup>。アーベントラント運動について、これまで研究を進めてきたのはアクセル・シルト (Axel Schildt) らドイツ現代史家であり、それゆえ運動の国際的な側面やヨーロッパ統合との関連については余り注目されてこなかったと言える<sup>5</sup>。

そこで本稿は、キリスト教民主主義の国際ネットワークに加え、キリスト教保守派のネットワークも視野に入れて、1925年から65年までのキリスト教政治勢力とヨーロッパ統合の関係を考察する。とくに、諸勢力の(国際) ネットワークの重層性とイデオロギー内容の多様性に注目し、この時

---

4 歴史家パーテルは、カイザーの研究が「アーベントラント」言説の役割を軽視しているのを「驚くべきこと」と評している。Kiran Klaus Patel, “Book Review: *Christian Democracy and the Origins of European Union*, by Wolfram Kaiser,” *The English Historical Review*, vol. 124, issue 509, 2009, pp. 1013-1014, p. 1014.

5 「アーベントラント」が本格的に歴史学の対象となったのは、ここ四半世紀のことである。なかでも傑出しているのが、シルトやヴァネッサ・コンツェ (旧姓プリヒタPlichta) らの研究である。1950年代の西ドイツ社会に関する浩瀚な論文で教授資格を取得した社会史家シルトは、その研究成果の一環として『アーベントラントとアメリカの間』という書を公刊した。その第1章でシルトは、50年代西ドイツの「時代精神」の一つの典型としてアーベントラント運動を検討している (Axel Schildt, *Zwischen Abendland und Amerika. Studien zur westdeutschen Ideenlandschaft der 50er Jahre*, München: R. Oldenbourg, 1999, S. 21-82. Vgl. auch ders., *Annäherungen an die Westdeutschen. Sozial- und kulturgeschichtliche Perspektiven auf die Bundesrepublik*, Göttingen: Wallstein, 2011, S. 78-115)。一方、コンツェの博士論文を基にした書『ドイツ人のヨーロッパ』は、戦間期から1960年代までのドイツにおける「ヨーロッパ」概念の多様性と、60年代以降の「ヨーロッパ」概念の「西欧化」(=自由民主主義化)を論証するために、前半部をアーベントラント運動に割いている (Vanessa Conze, *Das Europa der Deutschen. Ideen von Europa in Deutschland zwischen Reichstradition und Westorientierung (1920-1970)*, München: R. Oldenbourg, 2005, S. 25-206)。シルトの研究は西ドイツの社会思潮の解明をより重視し、コンツェの研究は「ヨーロッパ」理念のドイツにおける態様を解明することに重点があるが、両者に共通しているのは、戦後ドイツ連邦共和国の「西欧化」への関心である。こうした研究動向に対する筆者なりの評価は、拙稿「ドイツ現代史における『ヨーロッパ』理念の諸相」『北大法学論集』第59巻5号、2009年、257-264頁を参照。

代のキリスト教政治勢力のヨーロッパ諸構想が、反共主義や独仏協調の追求、あるいは補完性原理の重視などの大枠で一致しつつも（これらは「西洋の救済」というスローガンに纏められる）、自由民主主義に対する態度や、統合すべき「ヨーロッパ」の範囲については重要な相違を見せていたことを明らかにしたい。

なお本論に入る前に、ここで本稿の二つの限定について述べておきたい。第一は、時期の限定についてである。本稿の始点にとった1925年は、二つの点で象徴的な年と言える。一方でそれは、第一章で述べるように、パリにキリスト教民主主義政党国際事務局（SIPDIC）が設立された年であり、キリスト教民主主義の国際的な政党間協調の始まりを画している。他方、アーベントラント運動の起源にあたる雑誌『アーベントラント』が創刊されたのも1925年であった。また、終点の1965年は、形式的にはキリスト教民主主義の国境横断組織であるNEIが欧州キリスト教民主主義同盟（EUCD）に改組された年にあたる（このEUCDを基に、初の欧州議会直接選挙を3年後に控えた1976年に欧州人民党（European People's Party: EPP）が結成され、現在に至っている）<sup>6</sup>。さらに、第二ヴァチカン公会議（1962-65年）後の回勅「喜びと希望（Gaudium et spes）」において、教皇庁が漸く民主主義を積極的に肯定するようになったのも1965年だった<sup>7</sup>。そして、よりマクロに見ると1960年代半ばは、世俗化や価値意識の転換によって、キリスト教に基づく政治勢力が大きな危機を迎えた頃である<sup>8</sup>。結論から言えば、保守反動的であったアーベントラント運動は、この時期に世論への影響力を決定的に失っていくのである。

第二に、本稿は、「ヨーロッパ」単位のネットワークを対象とするものの、どうしても分析がドイツ中心にならざるを得なかった<sup>9</sup>。また、用語

6 欧州人民党については、さしあたり同党の元書記長ヤンセンによる次の準公式書を参照。Thomas Jansen, *The European People's Party: Origins and Development*, London: Macmillan, 1998 (zuerst: *Die Entstehung einer Europäischen Partei. Vorgeschichte, Gründung und Entwicklung der EVP*, Bonn: Europa Union Verlag, 1996)。本書は随時改訂されてきたが、2011年にはファン・ヘッケによって増補され、タイトルも変更された。Thomas Jansen and Steven Van Hecke, *At Europe's Service: The Origins and Evolution of the European People's Party*, Berlin / Heidelberg: Springer, 2011。

7 田口晃「キリスト教民主主義の歴史的位相」田口・土倉（編）『キリスト教民主主義と西ヨーロッパ政治』、9-17頁、12-13頁。

法もドイツ語圏の研究の影響を強く受けたものとなっている。とはいえかかる限界は、本稿が、統合史研究やキリスト教民主主義研究とともに、ドイツ政治史研究への貢献も志向しているからでもある。そこで、ドイツ政治史研究における本研究の位置を簡単に述べてから本論に入ろう。

ドイツ政治史におけるキリスト教民主主義と保守主義との関係を問題にしようとするなら、まず注目すべきは、第二次世界大戦後におけるキリスト教民主同盟・社会同盟(CDU/CSU)の成立、とくにアデナウアー時代のCDUによる、プロテスタント系も含む右派自由主義者層や保守主義者の包摂(の成功)、および党内における宗派間・左右間の緊張関係であろう<sup>10</sup>。とはいえ、この点については、すでにベッシュによる傑出した研究がかなりのところ明らかにしており<sup>11</sup>、邦語でも野田昌吾による一連の優れた業績がある<sup>12</sup>。本稿では、これら優れた業績に屋上屋を架けることは避け、違った角度から、すなわちヨーロッパ統合に対する宗派勢力のコミットメントの検討という角度から、ドイツにおけるキリスト教民主主義と保守主義との関係の様相に迫るとする形になる。

## 第一章 キリスト教民主主義の国際ネットワークとヨーロッパ統合

まず本章では、戦間期以来のキリスト教民主主義勢力のトランスナショ

- 
- 8 野田昌吾は1960年代半ばを、西欧キリスト教民主主義の「凋落」ないし「没落」の「第1の画期」と呼ぶ。野田昌吾「ドイツ・キリスト教民主同盟(CDU)」田口・土倉(編)『キリスト教民主主義と西ヨーロッパ政治』、79-102頁、79頁。
  - 9 なお本稿で言う「ドイツ」とは、ドイツ帝国(Kaiserreich: 第二帝政)、ヴァイマル共和国、ナチ体制、四カ国占領下のドイツ、ドイツ連邦共和国(西ドイツ)に概ね限定する。
  - 10 この点は、CDUとCSUを、そもそも純粋なキリスト教民主主義政党として論じてよいかという問題と関連するが、ここではその問題には立ち入らない。
  - 11 Frank Bösch, *Die Adenauer-CDU. Gründung, Aufstieg und Krise einer Erfolgspartei 1945-1969*, Stuttgart / München: Deutsche Verlags-Anstalt, 2001. 次の書評論文も参照。野田昌吾・金孔山「書評 F・ベッシュ『アデナウアーCDU』」『大阪市立大学法学雑誌』第51巻1号、2004年、235-249頁。
  - 12 前掲の野田「ドイツ・キリスト教民主同盟(CDU)」に加え、野田昌吾『ドイツ戦後政治経済秩序の形成』有斐閣、1998年を参照。

ナルなネットワーク形成と、そのヨーロッパ統合への影響を跡付けてみよう<sup>13</sup>。

- 
- 13 本章は、先行研究と公刊史料に依拠したものであり、筋立てや解釈はともかく、事実のレベルではヨーロッパの先行研究に付け加えるべきものをほとんど持たないことを断っておく。特定の論点で参照した文献については個別に注記するが、本章全般に関わる重要文献として、前掲のKaiser, *Christian Democracy and the Origins of European Union*とJansen & Van Hecke, *At Europe's Service*に加え、以下を挙げておきたい。Michael Gehler and Wolfram Kaiser, “Transnationalism and Early European Integration: The Nouvelles Equipes Internationales and the Geneva Circle 1947-57,” *The Historical Journal*, vol. 44, no. 3, 2001, pp. 773-798; idem, “Toward a “Core Europe” in a Christian Western Bloc: Transnational Cooperation in European Christian Democracy, 1925-1965,” in: Thomas Kselman and Joseph A. Buttigieg (eds.), *European Christian Democracy: Historical Legacies and Comparative Perspectives*, Notre Dame, Indiana: University of Notre Dame, 2003, pp. 240-266; Roberto Papini, *The Christian Democrat International*, trans. by Robert Royal, Lanham etc.: Rowman & Littlefield, 1997 (org. 1986).

公刊史料集としては、ゲーラーとカイザーが6カ国・15文書館から収集した史料を編纂した次のものが極めて有益であり、本稿でも頻繁に参照した。Michael Gehler und Wolfram Kaiser (Hg.), *Transnationale Parteienkooperation der europäischen Christdemokraten. Dokumente 1945-1965 / Coop eration transnationale des partis d mocrates-chr tiens en Europe. Documents 1945-1965*, M nchen: K.G. Saur, 2004。以下、本史料集については*Dokumente*と略す。また、いまや古典の位置を占めるリップゲンスとロートが編纂した全4巻の『ヨーロッパ統合史文書集』ももちろん重要であり、本稿では2巻以降を使用した。*Documents on the History of European Integration, Vol. 2: Plans for European union in Great Britain and in exile, 1939-1945*, ed. by Walter Lipgens, Berlin / New York, W. de Gruyter, 1986; Vol. 3: *The struggle for European Union by political parties and pressure groups in Western European countries, 1945-1950*, ed. by Walter Lipgens and Wilfried Loth, Berlin / New York: W. de Gruyter, 1988; Vol. 4: *Transnational organizations of political parties and pressure groups in the struggle for European Union, 1945-1950*, ed. by Walter Lipgens and Wilfried Loth, Berlin / New York: W. de Gruyter, 1991。以下、本史料集については*DHEI*と略す。

## 第一節 戦間期の国際協調の模索——キリスト教民主主義政党国際事務局 (SIPDIC)

カトリックの国境を越えたネットワークは、20世紀初頭までは専ら教会が組織したものだ。教会から距離を置いた、政党・政治家レベルの国際的な接触は、第一次世界大戦後に始まる<sup>14</sup>。こうした動きを主導したのが、1919年にイタリア人民党 (Partito Popolare Italiano: PPI) を創設したものの、24年10月以来ロンドンに亡命していたルイジ・ストゥルツォ (Luigi Sturzo, 1871-1959) である<sup>15</sup>。彼の音頭により、24年に設立されたばかりのフランス人民民主党 (Parti Démocrate Populaire: PDP) の招聘という形式で、1925年12月12・13日にカトリック政治家たちの最初の国

---

14 本節については、とくに次の三つの文献を参照。Alwin Hanschmidt, “Eine christlich-demokratische ‚Internationale‘ zwischen den Weltkriegen. Das ‚Secrétariat International des Partis Démocratiques d’Inspiration Chrétienne‘ in Paris,” in: Winfried Becker und Rudolf Morsey (Hg.), *Christliche Demokratie in Europa. Grundlagen und Entwicklungen seit dem 19. Jahrhundert*, Köln: Böhlau, 1988, S. 153-188; Guido Müller, “Anticipated Exile of Catholic Democrats: The Secrétariat International des Partis Démocratiques d’Inspiration Chrétienne,” in: Wolfram Kaiser and Helmut Wohnout (eds.), *Political Catholicism in Europe 1918-45*, Vol. 1, London / New York: Routledge, 2004, pp. 252-264; Wolfram Kaiser, “Von der Isolation im politischen Katholizismus in die (innere) Emigration. Transnationale Kooperation katholischer Volksparteien in Europa 1925-1933/38,” in: Jürgen Mittag (Hg.), *Politische Parteien und europäische Integration. Entwicklung und Perspektiven transnationaler Parteienkooperation in Europa*, Essen: Klartext, 2006, S. 215-228。また、Papini, *The Christian Democrat International*, pp. 19-47; Kaiser, *Christian Democracy and the Origins of European Union*, pp. 72-118; Jansen & Van Hecke, *At Europe’s Service*, pp. 3-10も参照。

15 イタリア人民党は1926年11月5日に解散命令を受けている。なお、ストゥルツォのような民主主義的なカトリック政治家・知識人に焦点を当てて、戦間期から戦後までのキリスト教民主主義の「連続性」を強調する研究があるが、後段で明らかにするように、それは余りにストーリーを単純化し過ぎていると言えよう。そうした連続性を強調した例として、Jean-Dominique Durand, *L’Europe de la Démocratie chrétienne*, Bruxelles: Editions Complexe, 1995。他方、イタリア人民党を戦間期の文脈からの確に分析したものとして、村上信一郎『権威と服従——カトリック政党とファシズム』名古屋大学出版会、1989年。



際会合がパリで開かれた。参加者は5カ国5政党から34人だった。参加政党（と人数）は、PDP（22）とPPI（2）に加え、ドイツ中央党（5）、ベルギーのキリスト教労働者連盟（Mouvement ouvrier chrétien: MOC）（2）、ポーランド・キリスト教民主党（Polskie Stronnictwo Chrześcijańskiej Demokracji: PSChD）（3）である。

ストゥルツォの当初の意図は、共産主義とファシズムの双方に対抗する、強力なキリスト教政党のインターナショナルの結成だった。しかし、こうしたストゥルツォの野心はすぐに挫折する。すでに25年の初会合で、参加者の自国・自党への配慮が強く、共通の目標を掲げるには程遠いことが判明したからである。そもそも公に華々しく会合を開催しなかったストゥルツォの希望に反して、PDP代表の思惑により非公開の会合となった。結局、各国のキリスト教政党の緩やかなネットワークを組織し、情報交換するための事務局をパリに設置することが決まった。

こうして「キリスト教民主主義政党国際事務局（Secrétariat International des Partis Démocratiques d'Inspiration Chrétienne: SIPDIC）」が発足した。PDPが事務局の運営を担い<sup>16</sup>、通例年に2回、執行委員会の会合が開かれた。また、年次大会も25年から32年まで8回開催されたが<sup>17</sup>、33年7月の中央党の解党以降は執行委員会の延長に過ぎないものとなった。そして、議決内容や会報も主に内部向けのものとした<sup>18</sup>。

結論から言えばSIPDICは、1939年に活動を止めるまで、計11カ国の政党が参加したものの、活発なフォーラムとはならなかった。それは、当時

---

16 PDPの役割については以下を参照。Jean-Claude Delbreil, “Les Démocrates d’inspiration chrétienne et les problèmes européens dans l’entre-deux-guerres,” in: *Le MRP et la construction européenne: Actes du colloque organisé les 18 et 19 janvier 1990 au Sénat, par le Centre d’Histoire de l’Europe du vingtième siècle et l’Amicale du MRP*, sous la direction de Serge Berstein, Jean-Marie Mayeur et Pierre Milza, conclusions de René Rémond, Bruxelles: Editions Complexe, 1993, pp. 15-39; idem, “Christian Democracy and Centrism: The Popular Democratic Party in France,” in: Kaiser & Wahnout (eds.), *Political Catholicism in Europe 1918-45*, pp. 116-135, esp. pp. 126-130.

17 開催地は、パリ（1925年）、ブリュッセル（26年）、ケルン（27年）、スヘーヘンボス（28年）、パリ（29年）、アントワープ（30年）、ルクセンブルク（31年）、ケルン（32年）。

の各国政治におけるナショナリズムの強さ、そしてカトリック政治家自身の権威主義体制に対する態度の曖昧さが原因だった。たとえば、ヴェルサイユ体制に対する修正主義の問題が影を落としたため、独仏間の協調は難しかった。もしSIPDIC参加者が独仏協調を謳った場合、自党内や自国内から「妥協」と攻撃される恐れがあったからである。

さらに重要だったのが、イタリアのファシズムに対する態度である。むろんストゥルツォは当初から反ファシズムという点での一致団結を望んでいたが、ヴァチカンがムッソリーニ体制を支持していたため、反ファシズムには二の足を踏む代表もいた。結局1926年にSIPDICは、民主主義を擁護し、国家の組織的暴力に反対する決議を採択するが、それは自党では周遍の立場にあったカトリック左派がSIPDIC内では多数派を占めていたからに過ぎない。依然として各国のカトリック政党内では、ファシズムや権威主義体制に共感を寄せる人々が少なくなかった<sup>19</sup>。

それゆえ、オーストリアやポルトガルの権威主義体制に対する態度も曖昧だった。とりわけ意見が割れたのは、1933/34年に権威主義的な「職能身分制国家 (Ständestaat)」を構築したオーストリア・キリスト教社会党の中心人物リヒャルト・シュミッツ (Richard Schmitz, 1885-1954) がSIPDICに参加し続けることへの是非である。シュミッツは1934年から38年まで「オーストロファシズム」下のウィーン市長を務めた人物である。ストゥルツォは、ドルフス＝シュシュニク体制を非民主的であると非難し、シュミッツの参加資格を制限しようとしたが、PDPの代表は、独立したオーストリアをナチス・ドイツに対する防波堤とみなし、その存在を容認した。イタリア人民党出身で反ファシズムのジャーナリストとして活躍したルッソ (Domenico Russo, 1876-1947) は、1935年のストゥルツォへの手紙のなかで、SIPDICがもはや「民主主義的な」諸政党の組織とは言えないと嘆いている<sup>20</sup>。

---

18 1931年1月にSIPDICの執行委員会は、偏狭なナショナリズムを非難し、平和を求める宣言を公にしたが、それは例外的なことだった。Vgl. Hanschmidt, "Eine christlich-demokratische ‚Internationale‘ zwischen den Weltkriegen," S. 179-180.

19 Müller, "Anticipated Exile of Catholic Democrats," p. 257.

20 Kaiser, *Christian Democracy and the Origins of European Union*, pp. 113-114.

結局、教会から独立したカトリック政党政治家の国際的な協調は、戦間期には極めて限定的なものに留まった。むしろこの時代には、次章で検討するような「アーベントラント」サークルやヨーロッパ文化同盟などの、イデオロギー的には保守的な社会的・文化的国境横断ネットワークの方が、政治的に重要な意味を有していたと歴史家のミュラーは結論している<sup>21</sup>。

## 第二節 亡命者のネットワーク

ドイツでナチ体制が成立し、中央党が解散した1933年以降、とくに第二次世界大戦が勃発してベネルクスとフランスが占領されると、大陸ヨーロッパのカトリック政治家の国際的な協力は、亡命先のイギリスやアメリカで試みられるようになった<sup>22</sup>。しかし、そもそも英米のカトリックには親ファシズム的な傾向が強く、イギリスの宥和政策やアメリカの孤立主義を支持する者が多かったため、ストゥルツォら大陸からの亡命者は当惑した。それでも、リベラルなカトリックを中心に、亡命者を支援する動きもあった。1936年11月にロンドンで設立された「人民と自由」グループがそれである。このグループは、演説会を開いて亡命者に自己主張の場を提供し、政治決議を採択するとともに、1938年から『人民と自由 (*People & Freedom*)』という月刊の会報を発行した。かかるイギリスでの動きはアメリカのカトリックも刺激し、同様に「人民と自由」という名を冠したグループが、ニューヨークやボストン、フィラデルフィア、ノートルダム、ロサンゼルスで小規模ながらも組織された<sup>23</sup>。

さらにストゥルツォたちは、「人民と自由」だけでは不十分と感じ、亡

21 Müller, "Anticipated Exile of Catholic Democrats," pp. 260-261.

22 本節については、とくに次を参照。Wolfram Kaiser, "Co-operation of European Catholic Politicians in Exile in Britain and the United States during World War II," *Journal of Contemporary History*, vol. 35, no. 3, 2000, pp. 439-465; idem, "Transnational Networks of Catholic Politicians in Exile," in: Kaiser & Wohnout (eds.), *Political Catholicism in Europe 1918-45*, pp. 265-285; Guido Müller und Jürgen Mittag, "Im Zeichen der Diktatur: Parteienkontakte und Europakonzeptionen des christdemokratischen Exils," in: Mittag (Hg.), *Politische Parteien und europäische Integration*, S. 251-269.

23 Kaiser, "Transnational Networks of Catholic Politicians in Exile," pp. 267-271.

命中の各国キリスト教民主主義者の対話の場として、1941年2月に国際キリスト教民主同盟 (International Christian Democratic Union: ICDU) を結成した。ICDUの名誉委員には、ストゥルツォとともに、チェコスロヴァキア亡命政府首相シュラーメク (Jan Šrámek, 1870-1956) や、ポーランド亡命政府の教育相でポーランド労働党最高協議会議長のハルレル (Józef Haller, 1873-1960) らが連なった。定例会合では、ゲスト・スピーカーが様々な政党の歴史と現状を報告し、相互理解を図るとともに、共通の利害について話し合ったらしい。とはいえ、とくに西欧出身のICDUのメンバーは、自国の政党内では周辺的な立場の者が多かった。それに対して、たとえば戦後にベルギーのキリスト教社会党 (Parti Social Chrétien: PSC) 党首となり、1950年代にはNEIの議長も務めるド・シュリヴェール (August de Schryver, 1898-1991) はICDUに数回しか参加していない。また、のちの人民共和運動 (Mouvement Républicain Populaire: MRP) 総裁 (1944-49) で外相 (1969-73) も務めるモーリス・シューマン (Maurice Schumann, 1911-98) も、1942年から43年にかけてICDUのフランス代表だったが、ほとんど参加していない。さらに、思想的にも「人民と自由」やICDUに集った人々は急進的であり、ヨーロッパ構想についても概ね大西洋主義的だった<sup>24</sup>。つまり亡命者のネットワークは、戦後のキリスト教民主主義の再建や、その国際的なネットワーク形成に、それほど大きな役割を果たしたとは言えない<sup>25</sup>。

結局、戦後のフランス、(西) ドイツ、イタリア、オーストリアで、新

---

24 Ibid., pp. 279-281. たとえば、亡命時のストゥルツォのヨーロッパ構想については、次の史料と解説を参照。Luigi Sturzo, "Problemi dell'Europa futura (April 1940)," in: *DHEI*, vol. 2, pp. 496-499; idem, "The International Order and Italy (March 1944)," in: *DHEI*, vol. 2, pp. 533-536. なおストゥルツォは、1940年9月にロンドンを去り、40年10月から46年8月までアメリカに亡命していた。

25 それゆえ、たとえば「ロンドンでの亡命者間のコンタクトが〔戦後の〕キリスト教民主主義諸政党による共通の綱領の定式化に本質的に貢献したことは明らかだ」(Heribert Gisch, "Die europäischen Christdemokraten (NEI)," in: Wilfried Loth (Hg.), *Die Anfänge der europäischen Integration 1945-1950*, Bonn: Europa Union Verlag, 1990, S. 227-236, hier S. 229; see also: *DHEI*, vol. 4, p. 478) といった統合史の連邦主義学派 (後述) 的な解釈は誇張と言えよう。

たなキリスト教民主主義政党の主導権を握ったのは、亡命者たちではなく、ロベール・シューマンやジョルジュ・ビドー (Georges Bidault, 1899-1983)、アデナウアーやヤーコプ・カイザー (Jakob Kaiser, 1888-1961)、デ・ガスペリ、レオポルト・フィグル (Leopold Figl, 1902-65) らのような、レジスタンスや国内亡命者だったのである<sup>26</sup>。

### 第三節 NEI (1947-1965年)

第二次世界大戦後、ヨーロッパのキリスト教民主主義者の多くは、国際的な協調の必要性を痛感していた。もちろんそこには、平和への切なる希求と、戦争で破壊された人的・組織的な繋がりを回復させようという意図があった。とはいえ、まずもって重要だったのは、新たに冷戦という状況が到来し、共産主義という脅威に対してヨーロッパ・レベルで対抗する必要性が認識されたことだった。国際協調を図った戦後のキリスト教民主主義者にとって反共産主義が何よりも重要だったことは、後述するNEIの第1回会合のテーマが「労働者階級の社会的地位と労使関係の現状」とされ、そこではマルクス主義が主たる敵と想定されていたことに示されている<sup>27</sup>。この点で、キリスト教民主主義のインターナショナル化は、ファシズムの台頭を許した戦間期への反省であるという以上に、共産主義というインターナショナルな運動に対する必然的な防衛反応だった。さらに、この反共産主義と表裏一体の関係にあるが、戦後のキリスト教民主主義者たちはヨーロッパの統合を望んだ。平和と反共と統合、この三大目標のため、各国のキリスト教民主主義者の国境を越えたネットワーク形成が進められたのである<sup>28</sup>。

こうした第二次世界大戦後のキリスト教民主主義の国際ネットワークを代表するものとして、二つのフォーラムが挙げられる。すなわち、NEIとジュネーブ・サークルである<sup>29</sup>。本節では、まずNEIについて検討しよう。

26 第二次世界大戦が政治的カトリシズムに与えた影響に関するバランスのとれた評価として、Martin Conway, *Catholic Politics in Europe 1918-1945*, London: Routledge, 1997, pp. 78-95.

27 “International Conference at Liège (Chaufontaine) 31 May - 2 June 1947,” in: *DHEI*, vol. 4, pp. 485-487. Vgl. auch: Joseph Lebret, “Botschaft [“Vision chrétienne”], NEI-Kongress, Lüttich, Mai 1947,” in: *Dokumente*, Nr. 8, S. 97-99.

NEI (Nouvelles Equipes Internationales: 新国際エキップ [新国際チーム]) は、各国のキリスト教民主主義グループから構成される国際組織である<sup>30</sup>。第二次大戦後に各国のキリスト教民主主義政党・政治家が国際協調の方策をそれぞれ模索するなか、スイス保守人民党 (Schweizerische Konservative Volkspartei: SKVP) のイニシアティブにより、1947年2月27日から3月2日にかけてヨーロッパのキリスト教政治家の最初の国際会合がルツェルンで開かれ<sup>31</sup>、そこで正式にNEIの結成が決まった。

NEIは、形式的には「政党」ではなく、各国・各地域の「エキップ (équipes: チーム)」から構成される。実際には各国の政党とほぼ同一だが、

---

28 とはいえ、もちろん各政党内でヨーロッパ統合に関する完全なコンセンサスが得られていたわけではない。ヨーロッパ政策をめぐるフランスMRPとイタリアDCの党内対立については次を参照。Linda Risso, “Cracks in a Façade of Unity: The French and Italian Christian Democrats and the Launch of the European Integration Process, 1945-1957,” *Religion, State & Society*, vol. 37, issue 1-2, 2009, pp. 99-114.

29 他にも、たとえば1949年に始動した欧州審議会の諮問議会の場でも、キリスト教民主主義者の国際協調が育まれたことが想定される。

30 NEIについては、次の諸研究を参照。Winfried Becker, “Die Nouvelles Equipes Internationales und der Föderalismus,” *Historisch-Politische Mitteilungen*, Heft 15, 2008, S. 81-102; Jac Bosmans, “Das Ringen um Europa. Die Christdemokraten der Niederlande und Deutschlands in den ‘Nouvelles Equipes Internationales’ (1947-1965),” in: ders. (Hg.), *Europagedanke, Europabewegung und Europapolitik in den Niederlanden und Deutschland seit dem Ersten Weltkrieg*, Münster: Lit, 1996, S. 123-148; Gisch, “Die europäischen Christdemokraten (NEI);” Jansen & Van Hecke, *At Europe’s Service*, pp. 11-21; Wolfram Kaiser, “Transnational Christian Democracy: From the Nouvelles Equipes Internationales to the European People’s Party,” in: Michael Gehler and Wolfram Kaiser (eds.), *Christian Democracy in Europe since 1945*, Vol. 2, London / New York: Routledge, 2004, pp. 221-237; Saskia Matl, “Europäische Christdemokraten auf dem Weg zur transnationalen Zusammenarbeit? Von den Nouvelles Equipes Internationales zur Europäischen Volkspartei,” in: Mittag (Hg.), *Politische Parteien und europäische Integration*, S. 289-312; Papini, *The Christian Democrat International*, pp. 49-67.

31 SKVPのエッシャー (1885-1954) による開会の辞を参照。Josef Escher, “Eröffnungsansprache, 28. 2. 1947, Convenium christlicher Politiker Europas, Luzern, 27. 2. - 2. 3. 1947,” in: *Dokumente*, Nr. 3, S. 87-88.

フランスの人民共和運動 (MRP) とベルギーのキリスト教社会党—キリスト教人民党 (Parti Social Chrétien - Christelijke Volkspartij: PSC-CVP) からは、個々の政治家が個人の資格で参加した。NEI創設時に政党単位で参加していたのは、スイスのSKVP、イタリアのキリスト教民主党 (Democrazia Cristiana: DC)、オーストリア人民党 (Österreichische Volkspartei: ÖVP)、オランダのカトリック人民党 (Katholieke Volkspartij: KVP)、ルクセンブルクのキリスト教社会党 (Parti chrétien-social: PCS) である。また、フランスやベルギーの代表と同様に、イギリスとザールラントから個人の資格で参加した者がいた。さらに、亡命者のグループもいた。彼らの出身地は、ブルガリア、ルーマニア、リトアニア、ハンガリー、ポーランド、チェコスロヴァキア、ユーゴスラヴィア、そしてバスクであった。後述するように、48年にはドイツのCDU / CSUもNEIに加盟する。54年には「オランダ・エキップ」の一員として反革命党 (Anti-revolutionaire partij: ARP) とキリスト教歴史同盟 (Christelijk-Historische Unie: CHU) も加盟した。なおPSC-CVPとMRPは、それぞれ59/60年と64年に政党単位で加盟することになった。

NEIの事務局はパリに置かれ、主たる意思決定機関である執行委員会の議長は、1947年から49年まではフランスMRPのロベール・ビシェ (Robert Bichet, 1903-2000)、49年から59年までは前出のベルギーのド・シュリヴェール、60年から65年までは同じくPSC-CVPのテオ・ルフェーヴル (Théo Lefèvre, 1914-73) が務めた。またNEIは、ほぼ毎年、特定の政治的問題をテーマにして年次大会を開催し、決議を採択している (表1を参照)<sup>32</sup>。さらに、53年にECSCの共同総会においてキリスト教民主主義会派 (CD-Fraktion) が結成されて以来、NEIはヨーロッパ諸機関のポストを割り振る場ともなった。

もともとNEIは、1948年5月の「ハーグ・ヨーロッパ会議」の開催や、「ヨーロッパ運動」の発足、そして欧州審議会 (Council of Europe: CE) の設立に貢献したトランスナショナルな運動体の一つとして、ヨーロッパ統合史研究の草分け的存在であるリップゲンス (Walter Lipgens, 1925-84)

---

32 各大会の決議の本文は、例えば以下に収録されている。EVP-Fraktion des Europäischen Parlaments (Hg.), *Zur Geschichte der christlich-demokratischen Bewegung in Europa*, Melle: Ernst Knoth, 1990, S. 159-196.

表1：NEIの大会一覧

回	年月日	開催地	テーマ
1	1947.5.31.	リエージュ (ベルギー)	労働者階級の社会的地位と労使関係の現状
2	1948.1.29.-2.1.	ルクセンブルク	ドイツ問題
3	1948.9.17.-19.	ハーグ (オランダ)	ヨーロッパの組織化 / 文化的状況
4	1950.4.12.-14.	ソレント (イタリア)	現代ヨーロッパにおけるキリスト教民主主義の目標
5	1951.9.14.-16.	バート・エムス (ドイツ)	ヨーロッパと平和
6	1952.9.12.-14.	フリブール (スイス)	ヨーロッパの民主主義諸国におけるキリスト教徒の強さと弱さ
7	1953.9.4.-6.	トゥール (フランス)	スープラナショナルな権威と主権の概念
8	1954.9.10.-12.	ブルージュ (ベルギー)	将来のヨーロッパにおけるキリスト教民主主義の経済・社会政策 / EDC挫折後のヨーロッパの状況
9	1955.9.16.-18.	ザルツブルク (オーストリア)	ヨーロッパの政治的・経済的統合
10	1956.5.25.-26.	ルクセンブルク	ヨーロッパ統合
11	1957.4.24.-27.	アレツォ (イタリア)	共産主義の危機に対するキリスト教民主主義の団結
12	1958.5.8.-9.	スヘーフェニンゲン (オランダ)	キリスト教民主主義政治における人格
13	1959.5.28.-30.	フライブルク (ドイツ)	統一と自由—キリスト教民主主義の成果と課題
14	1960.9.22.-24.	パリ (フランス)	キリスト教民主主義と第三世界
15	1961.10.12.-14.	ルツェルン (スイス)	キリスト教民主主義の政治活動の精神的基盤
16	1962.6.21.-23.	ウィーン (オーストリア)	キリスト教民主主義の社会政策

※1965年にNEIを改組して成立した欧州キリスト教民主主義同盟 (EUCD) は、その初の大会を「第17回大会」とし、NEIの正式な後継組織であることを示している。

※EVP-Fraktion des Europäischen Parlaments (Hg.), *Zur Geschichte der christlich-demokratischen Bewegung in Europa*, Melle: Ernst Knoth, 1990, S. 155-196およびJürgen Mittag (Hg.), *Politische Parteien und europäische Integration. Entwicklung und Perspektiven transnationaler Parteienkooperation in Europa*, Essen: Klartext, 2006, S. 732-746を基に作成。



らによって、道徳的に高く評価されながら研究されてきた<sup>33</sup>。かかる（たとえば主権国家の超克を無条件に「善」と捉えるような）規範主義的なアプローチがアラン・ミルワード（Alan S. Milward, 1935-2010）らによって厳しく批判されてきたことは、多くのヨーロッパ統合史の歴史オグラフィーが指摘する通りである<sup>34</sup>。

しかし近年、カイザーらにより、統合史研究の方法論として、トランスナショナルなネットワークにおける理念と政治過程のリンケージへの着目、そして「非公式の政治」への注目が促され、NEIは単なる「理想主義者のお喋りクラブ」ではなく、ヨーロッパ統合の進展に実質的に寄与したと再評価されている<sup>35</sup>。そこでは、従来のようにCEやECSCの設立局面だけでなく、ローマ条約の調印やそれ以降にも光が当てられるようになった。たとえば、1954年8月30日にフランス国民議会が欧州防衛共同体（EDC）条約の批准を拒否した2週間後、NEIは、ブルージュでの第8回年次大会で、6カ国による経済統合へと進む意志を表明している<sup>36</sup>。この西欧の共通市場の創設を要求した「ブルージュ・マニフェスト」は、NEIの個々のナショナル・エキップ（とくにCDU/CSUとMRP）への詳細なアンケートに基づくものであった<sup>37</sup>。さらにNEIは、55年と56年の大会も経済統合問題に費やした。カイザーの研究では、このようなNEIにおける緊密な協調こそが、政府間交渉における妥協を促し、EECの成立に導いたと評価されるのである<sup>38</sup>。

33 欧州大学院大学（European University Institute）のヨーロッパ現代史講座の初代担当者（1976-79）であるリプゲンスは、反プロイセン的なカトリックの歴史家であり、CDUの黨員かつヨーロッパ運動のメンバーであり、アデナウアー外交の熱烈な支持者であった。リプゲンスについては、次の二論文を参照。Wilfried Loth, “Walter Lipgens (1925-1984),” in: Heinz Duchhardt u.a. (Hg.), *Europa-Historiker. Ein biographisches Handbuch*, Bd. 1, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 2006, S. 317-336; Wolfram Kaiser, “„Überzeugter Katholik und CDU-Wähler“: Zur Historiographie der Integrationsgeschichte am Beispiel Walther Lipgens,” *Journal of European Integration History*, vol. 8, no. 2, 2002, pp. 119-128.

34 E.g. Wolfram Kaiser and Antonio Varsori (eds.), *European Union History: Themes and Debates*, Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2010, passim. 邦語では、遠藤乾「ヨーロッパ統合史のフロンティア——EU歴史オグラフィーの構築に向けて」遠藤乾・板橋拓己（編）『複数のヨーロッパ——欧州統合史のフロンティア』北海道大学出版会、2011年、3-41頁、4-5頁。

とはいえ本稿で注目したいのは、NEI内部の多様性である。NEI内にはいくつかの争点、対立軸があった。第一の争点は、世俗主義をめぐるものであり、フランスのMRPおよびベルギーのPSC-CVPと、その他の政党(スイスのSKVP、オーストリアのÖVP、イタリアのDC、のちにドイツのCDU / CSUも)との間の対立として、NEIの設立当初から顕在化していた。そもそも「新国際エキップ」という宗派色の薄い名称は、MRPと

- 
- 35 Kaiser, "Transnational Christian Democracy," pp. 230-234. カイザーが統合史研究の方法論を論じているものとしては(数多あるが)たとえば次を参照。Wolfram Kaiser, "From State to Society? The Historiography of European Integration," in: Michelle Cini and Angela Bourne (eds.), *Palgrave Advances in European Union Studies*, Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2006, pp. 190-208; idem, "History meets Politics: Overcoming the Interdisciplinary Volapük in Research on the EU," *Journal of European Public Policy*, vol. 15, 2008, pp. 300-313; idem, "Bringing People and Ideas Back in: Historical Research on the European Union," in: David Phinnemore and Alex Warleigh-Lack (eds.), *Reflections on European Integration: 50 Years of the Treaty of Rome*, New York: Palgrave Macmillan, 2009, pp. 22-39; idem, "Transnational Networks in European Governance: The Informal Politics of Integration," in: Wolfram Kaiser, Brigitte Leucht and Morten Rasmussen (eds.), *The History of the European Union: Origins of a Trans- and Supranational Polity 1950-72*, New York / London: Routledge, 2009, pp. 12-33; idem, "From Isolation to Centrality: Contemporary History Meets European Studies," in: Kaiser & Varsori (eds.), *European Union History*, pp. 45-65. 本稿では立ち入れないが、ヨーロッパ統合史の言わば「ガヴァナンス的展開」と位置づけられるカイザーの方法論が、ポスト・ミルワード時代の統合史研究において果たす役割については、川嶋周一「比較・関係・制度——国家を超える政治構造の歴史をいかに叙述するか」『創文』第516号、2009年、6-10頁；遠藤「ヨーロッパ統合史のフロンティア」、14-16頁を参照。
- 36 "Zusammenfassung der Aussprache, NEI-Kongress, Brügge, 10.-12. 9. 1954," in: *Dokumente*, Nr. 124, S. 421-422; "Brügger Manifest, NEI-Kongress, Brügge, 10.-12. 9. 1954," in: *Dokumente*, Nr. 125, S. 422-423.
- 37 Robert Houben, "Fragebogen zur Wirtschafts- und Sozialpolitik in der europäischen Integration in Vorbereitung auf den NEI-Kongress in Brügge, 10.-12. 9. 1954"; "Antworten der CDU/CSU, 8. 7. 1954, und der französischen Equipe [MRP], o.D. [Juli 1954]," in: *Dokumente*, Nr. 122, S. 407-413; idem, "Die Sozial- und Wirtschaftspolitik der christlichen Demokraten im Europa von morgen, NEI-Kongress, Brügge, 10.-12. 9. 1954," in: *Dokumente*, Nr. 123, S. 414-420.

PSC-CVPの意向が反映された結果である。前述のルツェルンにおける準備会合（1947年2月27日～3月2日）でMRPの代表が述べたように、彼らはNEIが教権主義的な「黒いインターナショナル」と捉えられることを恐れ、「キリスト教民主主義」という形容すら避けたのである<sup>39</sup>。結局、47年3月のNEIの「結成アピール」では、「NEIは、人民民主主義（*démocrate populaire*）を抱いた政治的・社会的な諸個人間の定期的なコンタクトを確立するために設立された」という文言が選択され、「キリスト教民主主義」という言葉は用いられなかった<sup>40</sup>。

この世俗主義をめぐる対立軸は、NEIの組織形態に関する考え方の違いと重なっている。すなわち、ゴルテ（Albert Gortais, 1914-92）らMRPはNEIを緩やかなネットワークに留めようとした一方、イタリアのピッツィオーニ（Attilio Piccioni, 1892-1976）やオーストリアのフルデス（Felix Hurdes, 1901-74）は、全政党を拘束する一つの綱領を有する団体への

38 Kaiser, *Christian Democracy and the Origins of European Union*, pp. 290-303. なおローマ条約以降については、idem, “A Transnational Policy Community in Retreat? The Christian Democratic Network in the EC 1958-72,” in: Antonio Varsori (ed.), *Inside the European Community. Actors and Policies in the European Integration 1957-1972*, Baden-Baden: Nomos, 2006, pp. 119-134.

39 “Christian-Democrats and Industrial Democracy,” *People & Freedom*, no. 94, July 1947 / no. 95, August 1947, in: *Dokumente*, Nr. 10, S. 101-102, hier S. 101. もともとMRPは、戦間期の社会カトリックの系譜を引き、保守派や教会とは無関係に、キリスト教民主主義左派が主体となって戦後成立したという経緯を持つ（上原良子「フランスのキリスト教民主主義勢力とヨーロッパ統合——MRP（人民共和運動）、1947年から1950年」『現代史研究』第44号、1998年、68-83頁、72頁）。そして、MRPの右派はNEIに個人として参加し、左派はMSEUE（*Mouvement socialiste pour les États-Unis d'Europe*: ヨーロッパ合衆国のための社会主義者運動）に参加していた。上原良子によると、MRPの欧州統合思想は「他のキリスト教民主主義のそれとは趣を異にする。西欧の一般的なキリスト教民主主義のヨーロッパ構想は「反共・自由」とカトリックの混合体であったが、MRPの欧州統合構想には「共和主義」とカトリックとが混在していた。フランス的な共和主義を基礎として、「平和」や、とりわけ「人権」「自由」、そして「進歩」や場合によっては「社会主義」をもそのイデオロギーの中に取り入れていた」（同上78頁）。

40 “Nouvelles Equipes Internationales: Inaugural Appeal, 2 March 1947,” in: *DHEI*, vol. 4, pp. 484-485. Auch in: *Dokumente*, Nr. 6, S. 95-96.

NEIの転換を求めていたのである<sup>41</sup>。

また次第に顕在化したものとして、ECSCを構成することになる「6カ国」の諸政党と、それ以外のグループとの間に生じた断絶がある。まず、ヨーロッパの分断がほぼ確定し、NEIが西欧の統合に専心するようになると、西欧グループと東欧の亡命者グループとの間の溝は深まった。また「6カ国」の諸政党が、ECSC、そしてEECの共同総会（議会）において同一会派として協調を深めていくと、最初はNEIに積極的に関わっていたオーストリアやスイスのメンバーとの距離が広がっていく<sup>42</sup>。

さらに重要なのは、1961年8月のイギリス、アイルランド、デンマークのEEC加盟申請以来先鋭化した、イギリスと北欧の保守政党の加盟をめぐるNEI内の意見の対立である。自党内にプロテスタント保守勢力を抱えたCDUがNEIの拡大再編に前向きな一方、イタリア、オランダ、ベルギー、フランスのグループは否定的であった<sup>43</sup>。

こうしてみると、第二次世界大戦後のキリスト教民主主義諸政党は、トランスナショナルな協調を進めること自体には合意できたものの、様々な対立軸を抱えていたことが分かる。1965年にNEIは「ヨーロッパ・キリス

---

41 NEIの青年部書記長を務めていたレヴァンドフスキ（1920-89）の回想を参照。Rudolf Lewandowski, “Der Traum von Europa. Die Christlich-Demokratische Internationale: Ihr Ursprung und ihre Entwicklung,” in: *Zur Geschichte der christlich-demokratischen Bewegung in Europa*, S. 65-73, hier S. 68. MRPやPSC-CVPの言い分、および伊奥の代表の意見については次のレポートを参照。“Christian-Democrats and Industrial Democracy,” *People & Freedom*, no. 94, July 1947 / no. 95, August 1947, in: *Dokumente*, Nr. 10, S. 101-102.

42 NEIにおけるオーストリア人民党（ÖVP）の役割については、Michael Gehler, “„Politisch unabhängig“, aber „ideologisch eindeutig europäisch“. Die ÖVP, die Vereinigung christlicher Volksparteien (NEI) und die Anfänge der europäischen Integration 1947-1960,” in: Michael Gehler und Rolf Steininger (Hg.), *Österreich und die europäische Integration 1945-1993. Aspekte einer wechselvollen Entwicklung*, Wien: Böhlau, 1993, S. 291-326. ÖVPとNEI以降のキリスト教民主主義政党・保守政党の国際ネットワークとの関係については、idem, “On the Long and Winding Road to European Union Membership: Austrian Party Elites in Transnational Political Networks,” in: Wolfram Kaiser, Brigitte Leucht and Michael Gehler (eds.), *Transnational Networks in Regional Integration: Governing Europe 1945-83*, Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2010, pp. 199-220, esp. pp. 203-208.

ト教民主主義同盟 (European Union of Christian Democrats: EUCD)」に改組された。議長にはイタリアDCのルモール (Mariano Rumor, 1915-90)、事務局長にはベルギーのティンデマンス (Leo Tindemans, 1922-) が選ばれた。そして1976年には欧州人民党 (EPP) が発足し、EC新規加盟国の保守政党も加えていくことになる。1979年の初の欧州議会直接選挙が、そうした組織化への誘因となったのである<sup>44</sup>。

#### 第四節 ジュネーブ・サークル (1947-1955年)

以上のように、第二次世界大戦後におけるキリスト教民主主義の公式の国際フォーラムであるNEIは、合意形成には不向きであった。そこで重宝されたのが、「ジュネーブ・サークル」(あるいは「ジュネーブ対話」「ジュネーブ会合」と呼ばれた、指導的なキリスト教民主主義政治家が集う定期的な秘密会合である<sup>45</sup>。1947年に始まり、ヨーロッパ統合や独仏関係に関する自由かつ率直な意見交換の場として、55年まで機能した。

このジュネーブ・サークルは、戦間期以来スイスで亡命者の組織に従事していたドイツ人のヨハン・ヤーコブ・キント＝キーファー (Johann

43 以後もキリスト教民主主義諸政党のグループと、イギリスや北欧などの保守政党との関係は争点となり続けた。さしあたり以下を参照。Geoffrey Pridham, “Christian Democrats, Conservatives and Transnational Party Cooperation in the European Community: Centre-Forward or Centre-Right?” in: Zig Layton-Henry (ed.), *Conservative Politics in Western Europe*, London: Macmillan, 1982, pp. 318-346; Thomas Jansen, “The Dilemma for Christian Democracy. Historical Identity and/or Political Expediency: Opening the Door to Conservatism,” in: Emiel Lamberts (ed.), *Christian Democracy in the European Union, 1945/1995: Proceedings of the Leuven Colloquium, 15-18 November 1995*, Leuven: Leuven University Press, 1997, pp. 459-472.

44 本稿では立ち入れないが、EUCDおよび欧州人民党発足後から今世紀にまで至る、キリスト教民主主義・保守主義の国際ネットワークのやや複雑な歴史と態様については次を参照。Jansen & Van Hecke, *At Europe's Service*; Matl, “Europäische Christdemokraten auf dem Weg zur transnationalen Zusammenarbeit?,” S. 301 ff.; Janosch Steuer und Siebo M. H. Janssen, “Die christlich-konservative Volkspartei. Potenziale und Probleme der Zusammenarbeit christdemokratischer und konservativer Parteien in der EVP,” in: Mittag (Hg.), *Politische Parteien und europäische Integration*, S. 579-601.

Jakob Kindt-Kiefer, 1905-78) と、「コスモポリタンかつポリグロット」のフランス人外交官・ジャーナリストで、「ビドーの懐刀」と呼ばれたヴィクトール・クツィーネ (Victor Koutzine, 1910-91) の尽力によって生まれた<sup>46</sup>。46年初頭に知り合った二人は、47年9月、当時「ドイツ・キリスト教民主・社会同盟の作業協同体」<sup>47</sup>の事務局長だったブルーノ・デルピングハウス (Bruno Dörpinghaus, 1903-95) に、独仏の指導者が意見交換する「クローズドのサークル」の形成を提案した。当座の目的は、来たるロンドン外相理事会 (1947年11月25日～) を前に、「現在の仏独関係」

---

45 ジュネーブ・サークルについては、とくに以下を参照。Michael Gehler, “Der ‘Genfer Kreis’: Christdemokratische Parteienkooperation und Vertrauensbildung im Zeichen der deutsch-französischen Annäherung 1947-1955,” *Zeitschrift für Geschichtswissenschaft*, 49. Jg., Heft 7, 2001, S. 599-625; idem, “The Geneva Circle of Western European Christian Democrats,” in: Gehler & Kaiser (eds.), *Christian Democracy in Europe since 1945*, pp. 207-220. また、当事者の回想である次も参照。Bruno Dörpinghaus, “Die Genfer Sitzungen. Erste Zusammenkünfte führender christlich-demokratischer Politiker im Nachkriegseuropa,” in: Dieter Blumenwitz u.a. (Hg.), *Konrad Adenauer und seine Zeit. Politik und Persönlichkeit des ersten Bundeskanzlers*, Bd.1: Beiträge von Weg- und Zeitgenossen, Stuttgart: Deutsche Verlags-Anstalt, 1976, S. 538-565.

46 キント＝キーファーとクツィーネの経歴について詳しくは、Gehler, “Genfer Kreis,” S. 600-603を参照。なお二人ともカトリックではなく、キント＝キーファーはザールラント生まれの福音派、クツィーネはロシア生まれ (フランス大使館職員の息子) の正教徒だったという。

47 四カ国占領下ドイツにおけるキリスト教民主主義政党の発展は地域ごとにバラバラで進み、占領地区を超えた党活動は困難な状況にあった。また、各党間の思想的違いも顕著であった。1946年にあるフランスの新聞はCDUを「ベルリンでは社会主義的で急進的、ケルンでは教権主義的で保守的、ハンブルクでは資本主義的で反動的、ミュンヘンでは反革命的で分立主義的」と揶揄している (クリストフ・クレスマン『戦後ドイツ史1945-1955——二重の建国』石田勇治・木戸衛一訳、未来社、1995年、171頁)。かかる分断と相違を乗り越えるため、全国レベルの党協議の場として暫定的に設置されたのが、「ドイツ・キリスト教民主・社会同盟の作業協同体 (Arbeitsgemeinschaft der Christlich-Demokratischen und Christlich-Sozialen Union Deutschlands)」であった (結局、全国レベルの党の結成は、東西分断、そして連邦共和国成立後の1950年まで待たねばならない)。なおデルピングハウスはヘッセンのCDU出身である。

について討議しておこうというものだった<sup>48</sup>。

結局、ジュネーブ・サークルの初回は1947年11月16・17日に開催されたが、ドイツ代表の正式な参加は48年3月21・22日の第2回会合からとなった。このときドイツからの参加者は、アデナウアーとカイザーに加え、のちのCDU連邦議会議員団長（1949～55年、61～64年）で西ドイツ外相（55～61年）のハインリヒ・フォン・ブレンターノ（Heinrich von Brentano, 1904-64）、CSUの初代党首ヨーゼフ・ミュラー（Josef Müller, 1898-1979）、やはりCSUで当時バイエルン州首相（のちアデナウアー内閣で連邦財務相（49～57年）と司法相（57～61年））だったフリッツ・シェファー（Fritz Schäffer, 1888-1967）であった。

中立国スイスは、とくにドイツ人政治家にとって、占領軍当局の目が届かない、秘密会合にうってつけの地であった。またフランスの政治家にとっても、まだドイツへの反感渦巻くフランス世論への配慮から、会合がクローズドの方が好都合であった。参加者は、基本的に西欧7カ国の諸政党（フランスのMRP、ドイツのCDU/CSU、オーストリアのÖVP、ベルギーのPSC-CVP、イタリアのDC、オランダのKVP、スイスのSKVP）から2～4人の代表が送られ、10人以上20人未満となった（NEIと異なり、東欧出身の亡命者は最初から招待されなかった）。会合の日程調整はキント＝キーファーとクツィーネが行い、通例2日間が会合に充てられた。会合は、参加者による自国の政治状況に関する報告から始まるのが恒例であり、また東側に関する情報交換も行われた。そして、次第に西欧の統合と独仏協調が議題を占めるようになっていく。ちなみに使用言語はフランス語であったという<sup>49</sup>。

なお、ジュネーブ・サークルとNEIの関係は明確ではなかった。欧州審議会発足直後の1949年6月の会合でサークルの今後の方向性が話し合われたとき、オーストリア人民党のフルデスやスイス保守人民党のマルティン・

48 サークルの準備過程について詳細は、Dörpinghaus, “Die Genfer Sitzungen,” S. 538-542. Vgl. auch Michael Gehler und Wolfram Kaiser, “Transnationale Parteienkooperation der europäischen Christdemokraten: Nouvelles Equipes Internationales und Genfer Kreis,” in: *Dokumente*, S. 29-79, hier S. 53-54.

49 以上、Dörpinghaus, “Die Genfer Sitzungen,” S. 541-548; Gehler, “Genfer Kreis,” S. 603-605.

ローゼンベルク (Martin Rosenberg, 1908-76) はジュネーブ・サークルの常設機構化とNEIへの統合を主張したが、ビドーらMRPの代表やオランダのセラレンス (Petrus J. S. Serrarens, 1888-1963) は秘密会合という性格を崩したがいなかった<sup>50</sup>。同年11月にクツィーネは、デルピングハウスに対して、「特定の問題に関するわれわれの諸政党の政策調整」はNEIで、「われわれ双方の友人間の国家レベルでの対話」、つまり独仏の指導者間の対話はジュネーブ・サークルで行うよう、分業を提案している<sup>51</sup>。

結局ジュネーブ・サークルは1955年に活動を停止するが、それはMRP内の温度差 (たとえばロベール・シューマンはサークルを重視せず、ようやく55年10月にパリで会合が開かれたときに初めて参加した) と、同党の衰退に因る。また、サークルが基本的に独仏協調のためのフォーラムとして機能したため、ベネルクスの参加者にとっては余り意味がなくなった所為でもある。

## 第五節 ジュネーブ・サークルとアデナウアー外交——「西側結合」の貫徹

本節では、1946年以来イギリス占領地区CDUの党首を務め、49年9月にドイツ連邦共和国の初代首相に就任するアデナウアーが、ジュネーブ・サークルを通じて、自己の「西側結合 (Westbindung)」路線を貫徹していく様を跡付ける。前節で見たジュネーブ・サークルが、ヨーロッパ統合史およびドイツ政治外交史に有した重みを強調しておきたいからである<sup>52</sup>。

---

50 “Genfer Kreis, 10. 6. 1949, Protokoll Koutzine,” in: *Dokumente*, Nr. 46, S. 178-187, hier S. 184-187. なおフルデスとローゼンベルクは、このときNEIの副議長だった。

51 “Victor Koutzine an Bruno Dörpinghaus, 5. 11. 1949,” in: *Dokumente*, Nr. 52, S. 193.

52 同時代的にもアデナウアー外交におけるジュネーブ・サークルの重要性は指摘されていたものの、その実態はほとんど明らかにされていなかった。アデナウアー外交の政策決定過程に関する古典的研究であるバーリングの傑作も、ジュネーブ・サークル (およびNEI) については誤りが多く、評価も定まっていない。Arnulf Baring, *Im Anfang war Adenauer. Die Entstehung der Kanzlerdemokratie*, 3. Aufl., München: Deutscher Taschenbuch Verlag, 1984 (zuerst: *Außenpolitik in Adenauers Kanzlerdemokratie*, München: R. Oldenbourg, 1969), S. 63-64.



前述のように、48年3月の第2回会合に参加したアデナウアーは、ジュネーブ・サークルの重要性を認識する。同年8月、ド・シュリヴェールらベルギーとオランダの主要な政治家4人をジュネーブ・サークルに招待する手紙のなかで、アデナウアーは「現今の〔西欧の〕状況においては、まさにキリスト教政治家が指導的にならねばなりません」と述べている<sup>53</sup>。その後アデナウアーは、1948年9月から新生（西）ドイツ国家の憲法を制定するためボンに招集された議会評議会（Parlamentarischer Rat）の議長を務めることとなり、以前にも増して多忙を極めていたが、それでもジュネーブ・サークルへの出席を重視した。49年2月4日、ヴァイマル共和国時代から家族ぐるみで付き合いしていた友人のオランダ人シュミッツ（Wim J. Schmitz, 1907-77）に次のように書いている。「この〔ジュネーブ〕会合は極秘で行われているのですが、私たちドイツ人にとって極めて重大な意味を持っているので、私はこれに絶対に参加しなければならないのです」<sup>54</sup>。

アデナウアーにとってジュネーブ・サークルは、ドイツ再軍備のような、場合によっては極めて危険なテーマについて率直に話し合うことができる理想のフォーラムだった。早くも1948年12月（つまり西ドイツ建国前から）、アデナウアーはサークルで、ロシアの脅威を強調しながら、ドイツがヨーロッパ防衛に貢献する必要性を主張している<sup>55</sup>。

またアデナウアーは、49年3月の会合で、フランスこそが西欧の再建と統合のリーダーシップをとるべきだと強調している。

ロシアの危険はますます切迫したものとなっている。[……] ドイツ人は悲惨な状況にある。国の半分がソ連に占領されているのだ。イギ

53 “An führende christliche Politiker in Belgien und den Niederlanden, 26. August 1948,” in: Konrad Adenauer, *Briefe 1947-1949*, bearb. von Hans Peter Mensing, Berlin: Siedler, 1984, Nr. 939, S. 302-303, hier S. 303.

54 Adenauer, *Briefe 1947-1949*, S. 640 (Anm. 2 bei Nr. 1073). ジュネーブ・サークルの日程調整は難しかったようである。たとえば次のアデナウアーとキント＝キーファーとのやり取りを参照。“An Dr. Jakob Kindt-Kiefer, Otelfingen / Zürich, 5. Juli 1948,” in: Adenauer, *Briefe 1947-1949*, Nr. 895, S. 271 (und Anm. 1, S. 582).

55 “Genfer Kreis, 22. 12. 1948, Protokoll Koutzine,” in: *Dokumente*, Nr. 36, S. 148-152.

リス人は「……ソ連について」見誤っており、深入りしようとはしない。それゆえ、フランスの役割はよりいっそう重要なものとなっている。ヨーロッパを防衛し救済するという役割である<sup>56</sup>。

そしてアデナウアーは、フランスとパートナーを組めるのはドイツ側では自分のみであることもアピールし続けた。前述の48年12月の会合でアデナウアーは、来たる西ドイツ国家の第一回総選挙で、もし社会民主党(SPD)が勝利した場合、「ドイツ議会はイギリスの影響下に置かれ」、結果的に将来のヨーロッパ組織でも「労働党のイギリスと社会主義の西ドイツが、キリスト教民主主義勢力を凌ぐことになるだろう」と警告した<sup>57</sup>。こうしたアデナウアーの熱意に圧されるかのように、MRPの代表者たち、とりわけビドーは、ドイツに対して驚くほど柔軟な姿勢で臨むとともに、アデナウアーをパートナーとして重用した<sup>58</sup>。また、共産主義への対抗と

---

56 “Genfer Kreis, 8. 3. 1949, Protokoll Koutzine,” in: *Dokumente*, Nr. 39, S. 160-169, hier S. 162.

57 “Genfer Kreis, 22. 12. 1948, Protokoll Koutzine,” in: *Dokumente*, Nr. 36, S. 148-152, hier S. 149. なお、かかるイギリス労働党政権に対するアデナウアーの反感は、終戦直後にケルン市長としてイギリス占領軍と対立した経験に基づいていると思われる。45年6月末にケルンはアメリカからイギリス占領軍の統治下に移ったが、市長アデナウアーは（それまでのアメリカ占領軍との良好な関係とは異なり）イギリス占領軍と悉く衝突し、結局10月6日に市長を罷免されたうえ、ケルン市からの追放および政治活動の禁止を言い渡されてしまう（この政治活動禁止措置は10月11日に緩和され、ケルン市外での活動は許可された。処分が全面的に解かれるのは12月13日である）。回顧録でアデナウアーは、イギリス占領軍があからさまに社会民主党を鼻直し、自分を冷遇した様を苦々しく描いている。Konrad Adenauer, *Erinnerungen 1945-1953*, Stuttgart: Deutsche Verlags-Anstalt, 1965, S. 26-29（佐瀬昌盛訳『アデナウアー回顧録』第1巻、河出書房、1968年、24-28頁）。

58 アデナウアーのビドーへの高い評価は、たとえば次のR・シューマンへの手紙を参照。“An den französischen Außenminister Robert Schuman, Paris, 4. November 1948,” in: Adenauer, *Briefe 1947-1949*, Nr. 998, S. 337-339, hier S. 337. フランスの対独政策の転換（弱体化政策から「ドイツ問題のヨーロッパ的解決」へ）におけるビドーの位置については、上原良子「フランスのドイツ政策——ドイツ弱体化政策から独仏和解へ」油井大三郎・中村政則・豊下楯彦（編）『占領改革の国際比較——日本・アジア・ヨーロッパ』三省堂、1994年、274-300頁、290-294頁を参照。

ヨーロッパの平和のためには独仏の和解が必要であると認識していた他の西欧のメンバーも、アデナウアーの西側結合政策を支えようとした<sup>59</sup>。

なお、西ドイツ建国を控えた49年の夏以来、アデナウアーはもはや直接ジュネーブ・サークルに顔を出すことはなくなったが<sup>60</sup>、外交顧問のヘルベルト・ブランケンホルン（Herbert Blankenhorn, 1904-91）や首相府次官（51～53年）のオッター・レンツ（Otto Lenz, 1903-57）を派遣し、引き続きサークルを積極的に活用する<sup>61</sup>。またクツィーネやキント＝キーファーも、定期的にアデナウアーと接触している。たとえば50年3月、つまりフランスがモネ（Jean Monnet, 1888-1979）を中心にシューマン・プランを練っていた頃、アデナウアーはクツィーネを通じて、独仏の石炭・鉄鋼および化学セクターの統合をビドーに提案していた<sup>62</sup>。

また、50年6月25日の朝鮮戦争勃発を機に、ジュネーブ・サークルの主たる議題はドイツ再軍備問題とEDC交渉で占められていくが、この件につきアデナウアーやブランケンホルンと対話を重ねたクツィーネは、アデナウアーの外交構想について、ビドーに次のように報告している。

外交構想については、アデナウアー首相はヨーロッパ連邦というカードに全てを賭けている。彼の外交政策全てが本質的にこの目的へと向けられている。というのも、彼の計画全体を司る理念である仏独協調は、より大きな西欧（l'Europe occidentale）という枠組みでしか実現できないと彼が判断しているからである。こうしてアデナウアー首相は、かつてのライヒの統一性を取り戻すよりも、西欧へのドイツの統合を重視し、ドイツの統一を慎重に犠牲にしているのである<sup>63</sup>。

59 E. g. “Genfer Kreis, 21. 11. 1949, Protokoll Koutzine,” in: *Dokumente*, Nr. 54, S. 196-205, hier S. 197-202.

60 “Victor Koutzine an Bruno Dörpinghaus, 5. 11. 1949,” in: *Dokumente*, Nr. 52, S. 193.

61 レンツは、ジュネーブ・サークルへの参加を通じてアデナウアーのヨーロッパ政策の重要性を学んだという。Vgl. Otto Lenz, *Im Zentrum der Macht. Das Tagebuch von Staatssekretär Lenz 1951-1953*, bearbeitet von Klaus Gotto, Hans-Otto Kleinmann und Reinhard Schreiner, Düsseldorf: Droste, 1989, S. XIII (“Einleitung”).

62 “Proposition du Chancelier Adenauer, Koutzine an Monsieur le Président [Bidault], 22. 3. 1950,” in: *Dokumente*, Nr. 61, S. 223.

## 「西洋の救済」(1)

ドイツ統一よりも西欧統合を優先するアデナウアーのかかる姿勢はその後一貫していた。1952年3月10日、EDC交渉中にソ連がドイツの再統一と中立化を持ち掛けた「スターリン・ノート」を提示したときも、同24日のジュネーブ・サークルでレンツは、アデナウアーの変わらぬ「西側結合」への姿勢を確認している。また、52年5月26・27日の西側諸条約（ドイツ条約およびEDC条約）の調印後、レンツは同6月16日および11月3日のサークルで、条約批准前に西側がソ連の揺さぶりに動じないよう釘を刺している<sup>64</sup>。

このようにアデナウアーは、ジュネーブ・サークルを通じて、自己の国際的立場を強めるとともに、その「西側結合」政策を貫徹させていく。なおアデナウアーは、ジュネーブ・サークルのみならず、CDUにおける対外政策の窓口をほぼ独占する一方、国際的にも「ヨーロッパのキリスト教民主主義の重なり合った主要なネットワーク全てにおいて（直接・間接に）鍵となる役割を果たした唯一人の指導的政治家」という位置を占めることとなった<sup>65</sup>。

## 第六節 キリスト教民主主義の「ヨーロッパ」——「西洋」へのドイツの再統合

以上みたような第二次大戦後のキリスト教民主主義諸政党・政治家たちのトランスナショナルな協調は、欧州審議会やECSCの設立、そして西欧

---

63 “Report ‘La Tactique du Chancelier Adenauer,’ Koutzine an Bidault, o.D. [November 1951],” in: *Dokumente*, Nr. 95, S. 315.

64 “Genfer Kreis, 16. 6. 1952, Protokoll Grubhofer,” in: *Dokumente*, Nr. 98, S. 321-327, hier S. 324-325; “Genfer Kreis, 3. 11. 1952, Protokoll Grubhofer,” in: *Dokumente*, Nr. 105, S. 345-351, hier S. 346-348. Vgl. auch: Lenz, *Im Zentrum der Macht*, S. 283-284, 365-366, und 454-455.

65 Wolfram Kaiser, “Informal Politics and the Creation of the European Community: Christian Democratic Networks in the Economic Integration of Europe,” in: Wolfram Kaiser, Brigitte Leucht and Michael Gehler (eds.), *Transnational Networks in Regional Integration: Governing Europe 1945-83*, Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2010, pp. 85-107, pp. 92-93. カイザーによると、アデナウアーに比べると、ビドーはジュネーブ・サークルを専ら重視し、シューマンは個々の政治家との個人的なコンタクトに頼る傾向があり、デ・ガスペリは党内・国内政治に追われていたという。

統合によるドイツ問題の解決と独仏和解に貢献した。さらに、こうした国際的な対話から、キリスト教民主主義独特の「ヨーロッパ」概念が育まれていった。

言うまでもなく、キリスト教民主主義の「ヨーロッパ」概念の鍵は、戦間期から継続し、冷戦という状況下で強められた、反共である。ビドーは、1948年10月のジュネーブ・サークルにおいて、ソ連の脅威を強調し、「私たちは新しいイスラムの前に立っています」と述べている<sup>66</sup>。まさにキリスト教民主主義者にとってヨーロッパ統合は、共産主義という新しい「東方」の「異教」の脅威に対する「防塁」の構築であった<sup>67</sup>。

しかしゲーラーとカイザーは、第二次世界大戦後のキリスト教民主主義の反共は、戦間期のものと違い、断固として民主主義的な論調で展開されたと主張する。さらに、もはや反近代的な自由主義批判のレトリックも用いられなくなったとする。こうして、共産主義でもなければ自由放任でもない、社会改革を志向した近代的・民主主義的な「ヨーロッパ」概念が展開されたというのである<sup>68</sup>。

そして、キリスト教民主主義の「ヨーロッパ」の最も重要なコンセプトは、キリスト教的西欧あるいは「西洋 (Abendland / l'Occident)」へのドイツの再統合というものである<sup>69</sup>。早くも第2回NEIルクセンブルク大会 (1948年1月30日～2月1日) で「ドイツ問題」がテーマとなったが、この大会にはドイツ代表も参加が認められ、CDUからはアデナウアーとカイザーが、CSUからはミュラーが、そして中央党のカール・シュピーカー (Carl Spiecker, 1888-1953) の代理として、自身は当時無所属だった若きライナー・バルツェル (Rainer Barzel, 1924-2006) が出席した。政治的な国際会議の場にドイツの参加が認められたのは実質的にはこれが最初であり、ドイツの国際社会復帰への予行練習となった。アデナウアー

66 “Genfer Kreis, 21. 10. 1948, Aktennotiz Felix Hurdes für Leopold Figl und Karl Gruber,” in: *Dokumente*, Nr. 35, S. 146-148, hier S. 147.

67 E.g. Kai-Uwe von Hassel, “Die Integration Europas, Entwurf für einen Vortrag von Heinrich von Brentano bei der NEI-Tagung in Bad Ems, September 1951,” in: *Dokumente*, Nr. 83, S. 284-288.

68 Gehler & Kaiser, “Transnationalism and Early European Integration,” p. 781; idem, “Toward a ‘Core Europe’ in a Christian Western Bloc,” p. 251.

69 Kaiser, “Transnational Christian Democracy,” pp. 227-230.

はそこで、ドイツ人の「集団的罪責」を断固否定するとともに、ヨーロッパ統一と、その基盤となる仏独友好、そして「キリスト教的西洋の救済」を訴える演説までしている<sup>70</sup>。このアデナウアーの演説は、まだ占領下にあったドイツの「外交的成功」と評された<sup>71</sup>。

さらに注目すべきことに、この第2回NEI大会で「ドイツ問題」について演説した者たちは、概して「二つのドイツ」論、すなわち「善いドイツ」と「悪いドイツ」を区別する議論を展開している。これは、通俗的なカトリック型の世界史解釈に基づいている。つまり、エルベ以东の「ルター的」で「プロイセン的」な「悪いドイツ」と、ローマ・カトリック的で「非プロイセン的」な西部の「善いドイツ」を区別するのである<sup>72</sup>。かかる議論は、ドイツ人の「集団的罪責」を否定するだけでなく、ドイツの東西分断の容認にも繋がっていくものである。

また、ナチズムはドイツ固有の問題ではなく、ヨーロッパ全体の問題、すなわち「物質主義 (materialism)」の蔓延が齎した災禍であったとの解釈も提示された<sup>73</sup>。つまり、ナチズムもボルシェヴィズム同様、道徳的

---

70 Konrad Adenauer, "Ansprache, NEI-Kongress, Luxemburg, 30. 1.-1. 2. 1948, rekonstruiert von Hans August Lückner nach Erinnerungen und zeitgenössischen Quellen," in: *Dokumente*, Nr. 18, S. 118-120. Auch in: *DHEI*, vol. 4, pp. 490-492. Vgl. auch: "Die Luxemburger Tagung. Adenauer als Gast der christlichen Parteien Westeuropas, in: *Die Welt*, 3. 2. 1948," in: *Dokumente*, Nr. 20, S. 122-123; "Christlich-demokratische Internationale?," in: *Rheinischer Merkur*, 7. 2. 1948," in: *Dokumente*, Nr. 21, S. 123-124.

ドイツ人の「集団的罪責」がルクセンブルク大会で問題となった理由は、オランダのカトリック人民党の代表が、ドイツ人の「集団的罪責」を承認することを、CDU / CSUがNEIに加盟する条件として挙げていたからである。CSUのミュラーの回想を参照。Josef Müller, *Bis zur letzten Konsequenz. Ein Leben für Frieden und Freiheit*, München: Süddeutscher Verlag, 1975, S. 360-361. CDU / CSUのNEI加盟問題については次を参照。Bosmans, "Das Ringen um Europa," S. 139-141.

71 Baring, *Im Anfang war Adenauer*, S. 63.

72 典型例は次に見られる。P. J. S. Serrarens, "Le problème allemand, son aspect politique, NEI, Le problème allemand, Session de Luxembourg, 30. 1.-1. 2. 1948," in: *Dokumente*, Nr. 17, S. 116-117.

73 E.g. Karl Wick, "Die deutsche Frage, Exposé, NEI-Kongress, Luxemburg, 30. 1.-1. 2. 1948," in: *Dokumente*, Nr. 14, S. 107-109.

に退廃した「物質主義」の世界の病と診断されたのである<sup>74</sup>。となると重要なのは、ヨーロッパ、とくにドイツの「再キリスト教化」「キリスト教共同体への回帰」ということになる<sup>75</sup>。もちろん、ドイツの再建とその西欧への編入には経済的な必要性があったわけだが<sup>76</sup>、そうした現実的な計算も、以上のような理念的前提がなければ難しかっただろう。ルクセンブルク大会の最終決議は、次のような文言で始まっている。

ドイツ問題の解決にはヨーロッパの包括的な再建が重要であり、逆もまた言える。この分かち難い二つの目標を達成するためには、とりわけキリスト教文明の遺産が、忠実に守られ、あるいは再発見されねばならない<sup>77</sup>。

このように、キリスト教民主主義者たちの「ヨーロッパ」構想の鍵は、キリスト教的な「西洋」へのドイツの再統合というものであった。そして、

---

74 かかる「物質主義」批判は、この時代のキリスト教民主主義のイデオロギー全体を理解するための鍵である。さしあたりCDUの政治家たちにおける「反物質主義」とナチズム批判・ボルシェヴィズム批判の関係については以下を参照。Maria Mitchell, “Materialism and Secularism: CDU Politicians and National Socialism, 1945-1949,” *Journal of Modern History*, vol. 67, no. 2, 1995, pp. 278-308; idem, ““Antimaterialism” in Early German Christian Democracy,” in: Kselman & Buttigieg (eds.), *European Christian Democracy*, pp. 164-198. また、アデナウアーの「物質主義」批判が鮮明に表れているテキストとして次を参照。Konrad Adenauer, „Die Demokratie ist für uns eine Weltanschauung“. *Reden und Gespräche (1946-1967)*, Im Auftrag der Konrad-Adenauer-Stiftung e.V., hg. von Felix Becker, Köln / Weimar / Wien: Böhlau Verlag, 1998, S. 2 - 3 ; ders., *Reden 1917-1967*, S. 85-86; ders., *Erinnerungen 1945-1953*, S. 45 (邦訳43頁).

75 Pierre Frieden, “Le problème allemand, son aspect spirituel et culturel, NEI, Le problème allemand, Session de Luxembourg, 30. 1.-1. 2. 1948,” in: *Dokumente*, Nr. 15, S. 109-112, hier S. 112.

76 Désiré Lamalle, “Le problème allemand, son aspect économique, NEI, Le problème allemand, Session de Luxembourg, 30. 1.-1. 2. 1948,” in: *Dokumente*, Nr. 16, S. 112-116; also in: *DHEI*, vol. 4, pp. 488-490.

77 *Zur Geschichte der christlich-demokratischen Bewegung in Europa*, S. 160.

「西洋の救済」(1)

こうした理念は、アデナウアーをはじめとするキリスト教民主主義者のみならず、西ドイツの宗教的な保守派の人々の理念と共鳴し合うこととなる。